毎月 11 日に発行　　2018 年 2 月 11 日

今川 悟

未来を考える力を **気仙沼復興レポート㊽**

先進事例に学ぶ震災遺構

東日本大震災からもうすぐ 7 年の節目を迎えるが、保存された震災遺構が各地で公開され始めている。気仙沼市は来年 3 月の公開へ向けて、気仙沼向洋高校の被災校舎を保存整備し、併設する震災伝承施設を建設する計画を進めている。しかし、被災地でも最大規模の遺構となるため、その管理・運営方法に課題を残したままだ。そうした中、宮城県は昨年 8 月、震災遺構などを活用した震災の教訓伝承などを検討する有識者会議を設置。来月にはその方向性を取りまとめることにしている。震災遺構として公開が始まった仙台市の旧荒浜小学校、東松島市の旧野蒜駅などを事例に、震災伝承の意義や課題についてあらためて考えたい。

■ 県内では 8 施設を保存

震災遺構については気仙沼復興レポート⑩と㊱でも紹介したが、国の復興予算によって各市町で 1 カ所の保存にかかる初期費用が支援される。これまでは被災したままの状態で外部から見学していたが、住宅や産業の再建が進むとともに保存整備が進み、内部も公開されるようになった。岩手県では宮古市が被災した「たろう観光ホテル」を取得・整備し、2016 年 4 月から内部公開して注目された。

震災遺構の整備完了予定

市町名	保存遺構	整備完了
仙台市	旧荒浜小	2017 年 4 月
東松島市	旧野蒜駅	2017 年 11 月
気仙沼市	気仙沼向洋高旧校舎	2019 年 3 月
山元町	旧中浜小	2019 年 3 月
石巻市	旧門脇小	2020 年 3 月
	大川小旧校舎	2020 年 3 月
女川町	旧女川交番	2020 年 6 月
南三陸町	防災対策庁舎（県が保存）	2020 年 9 月

※南三陸町は復興祈念公園の完成時期

気仙沼市の震災遺構（気仙沼向洋高校被災校舎）と、遺構に併設する伝承施設の工事は 1 月 25 日に着工。総事業費は 11 億 8600 万円。

宮城県内では、気仙沼市など 6 市町と県が震災遺構として 8 施設を保存する方針を決定。仙台市の旧荒浜小学校で昨年 4 月から内部公開がスタートし、11 月には東松島市の旧野蒜駅も整備が完了した。県の調査によると、2020 年内に全施設の保存整備が終わる見込みだ。

震災遺構のほかに、各市町で震災の被害や教訓を伝える伝承施設、震災メモリアル公園などの整備が進んでいる。石巻市では、宮城、岩手、福島の各県に 1 カ所ずつ整備される国営復興祈念公園が計画されている。

■ 県がネットワーク化検討

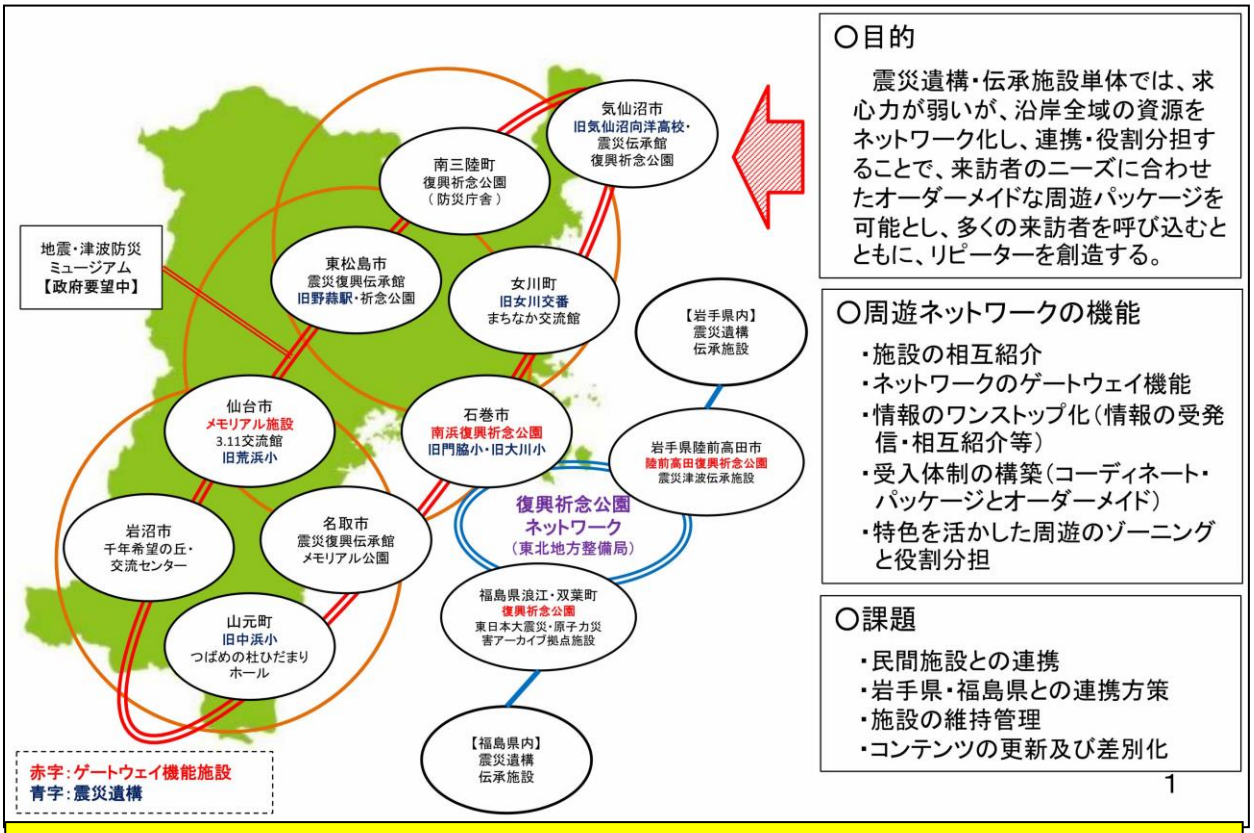
国が 2015 年 11 月に復興予算で遺構保存を支援する方針が示したことを受け、宮城県は同年 12 月に震災遺構有識者会議を設置。各市町が候補として挙げた施設について評価し、特に価値が高いと評価したものの保存の賛否が分かれていた南三陸町の防災対策庁舎を県が一時保存することを決めた。各市町が保存を決めた震災遺構については、「遺構間のネットワーク形成、防災学習やフィールド体験学習などの面で必要な支援を行っていく」としていた。

そして 2017 年 8 月、県は「東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議」を設置。東北大学災害科学国際研究所の今村文彦所長を座長に、研究者、中間支援組織、マスコミなどの 10 人で構成し、気仙沼市自主防災組織連絡協議会の臼井弘会長もメンバー入りした。

この有識者会議で検討しているのは、震災の記憶と教訓を伝承するための「理念」「あるべき姿」「今後の取り組み」で、各市町の取り組みについて情報共有したうえで、ネットワークの構築などを模索している。これまで 5 回の会議を重ね、来月に方向性をまとめる予定だ。

課題となっているのは、各施設の展示・伝承内容の共通化と差別化、ネットワークマネジメント機能の担い手など。ネットワークを運営する組織の機能として、①震災記憶・教訓の収集と整理活用②教育と研修③発信と交流④ネットワークの形成と維持ーを検討し、兵庫県の伝承施設を管理する「ひょうご震災記念 21 世紀研究機構」、新潟県の「中越防災安全推進機構」などの先進事例も研究している。

有識者会議とともに設置した「東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討市町会議」では、各市町の担当者レベルで協議してきた。震災遺構や伝承施設の維持管理の問題、防災教育への取り組みなどについて意見があった。3 月のまとめを受けて、ネットワークの構築や各施設の支援に対する宮城県の動きが注目される。



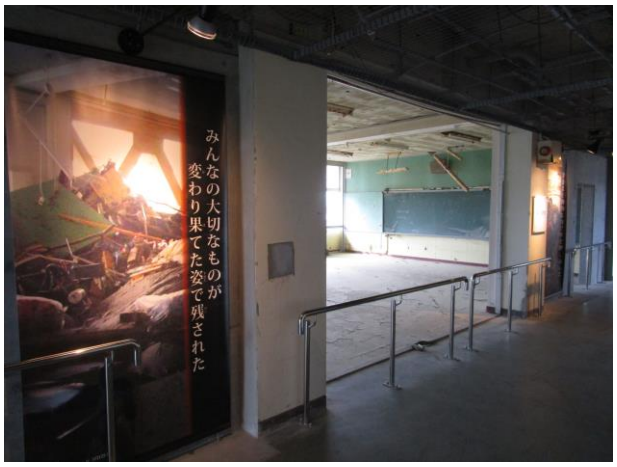
第 4 回宮城県東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議で示された遺構ネットワークのイメージ

■ 荒浜小学校は無料公開

気仙沼市の震災遺構と同じように、被災した校舎を保存して内部に入れるようにしたのが仙台市の旧荒浜小学校である。被災した内部を常時公開する初の学校施設として昨年 4 月 30 日から公開を始め、半年間で 4 万 9300 人が訪れている。

旧荒浜小の校舎は 4 階建てで、津波は 2 階まで到達したが、子どもたちや住民ら 320 人は屋上に避難して無事だった。仙台市は津波の威力を伝える震災遺構として保存・整備。設計、工事、展示にかかった費用は 2 億 3649 万円で、管理棟や外構を除く部分には復興交付金 1 億 6504 万円を充てることができた。

1、2 階は津波で被災した教室などを被災直後の



写真とともに見学でき、被害のなかった 4 階は震災の伝承コーナーとして、震災の映像や震災前の写真などを見ることができる。屋上からは荒浜地区の復興の様子を一望できる。気仙沼市は被災した校舎とは別に伝承施設を整備するが、旧荒浜小は一体的にしたのだ。津波から緊急一時避難場所にもなっている。

■ 1 日平均 340 人が見学

開館時間は午前 10 時から午後 4 時で、月曜日と第 2・第 4 木曜日などは休館する。入館無料。昨年 10 月末まで 1 日平均 340 人が入館し、最高は 5 月 5 日の 1727 人だった。企業や町内会の視察、修学旅行などで 380 団体を受け入れた。

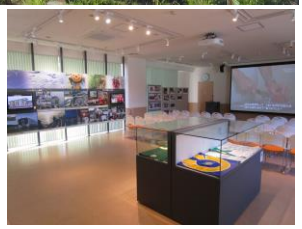
仙台市の直営施設であり、管理棟を整備し、常駐スタッフとして嘱託職員 4 人を雇用している。運営費用は今年度予算で 2600 万円（嘱託人件費除く）。仙台市まちづくり政策局防災環境都市推進室によると、長期的な保存や維持管理をどのように行っていくかが最大の課題で、躯体が寿命を迎えた後に現状と同様に校舎に入れるように改修するか、校舎外からの見学にするのかの方針を今後整理して、それに応じた維持修繕を行っていく必要があるという。

■ 東松島は野蒜駅と伝承館

東松島市は被災した野蒜駅（ＪＲ仙石線）のプラットホームを震災遺構として保存し、駅舎と観光情報センターだった建物（2 階建て）を震災復興伝承館として 2016 年 10 月にリニューアルオープンさせた。メモリアルパーク構想としてさらに復興祈念公園も整備し、市内最大の 500 人が犠牲となった野蒜地区に追悼と伝承の場をまとめた。

プラットホームには、津波で折れ曲がった看板、線路などが残された。約 4000 万円で改修した伝承館には市の指定管理を受けた奥松島公社のスタッフ 2 人が常駐し、約 1000 枚の写真や映像で被害と教訓を伝えている。入館無料で、オープンから 10 カ月間で月平均 2300 人が訪れている。ピークは 3 月 11 日の前後で、100 人規模の団体を受け入れることもある。

驚いたのは、施設内にコンビニが併設されていたことだ。気仙沼市では震災遺構や伝承施設での飲食に慎重な意見もあったが、東松島ではコンビニに対する抵抗はないどころか、「コンビニのお客さんが伝承館に立ち寄ってくれることもある。そうした人たちに震災の教訓を伝えることも大切」と地元のスタッフは話していた。



■ 被災小学校を防災宿泊施設に

東松島市では、被災した旧野蒜小学校を防災体験型宿泊施設「ＫＩＢＯＴＣＨＡ（キボッチャ）」とする計画が進んでいる。自衛隊ＯＢらが危機管理教育などを行う株式会社「貴凛庁」が施設を活用し、被災施設から希望のある未来の発信を目指す。

この施設は、1 階に大浴場、物産店、食堂、2 階に防災知識を遊びながら学べる室内パーク、シアター、資料館、3 階に防災合宿や企業研修にも利用できる宿泊フロア（68 床）を整備する。今年 4 月のオープンを目指して準備を進めており、初年度は小・中学生など 6 万 8000 人の利用を見込んでいる。入館料は子ども 300 円、一般 700 円。改修事業費は 3 億 2000 万円で、6 割は県が補助する。

運営会社は施設のサポーターを募集している。個人は 1000、5000、1 万円の寄付で招待券などをお返しし、企業は 5 万円以上の寄付でエントランスに企業名のプレートを設置できる特典を用意している。被災した旧浜市小学校を発光ダイオードによる植物工場とする計画もある。野蒜小学校とともに被災校舎を活用する企業を公募した成果であり、校舎の改修と維持管理費用は企業の負担だが、市は 10 年間無償で貸し出すことにした。

防災体験型宿泊施設のイメージ（貴凛庁ＨＰから）

■ お伊勢浜の水門も保存

気仙沼市では、新たに杉ノ下防潮水門（**写真㊦**）が震災遺構として残されることが決まった。地元の階上地区まちづくり協議会の要望を受け、宮城県に市への譲渡を要請しており、津波の威力を伝える遺構として撤去せずに残置することにした。

この水門はお伊勢浜海水浴場の脇にあり、津波によってコンクリート施設の一部が横転したままとなっている。防潮堤を内陸側にセットバックして整備するため、残しても影響がない。近くには気仙沼向洋高校の被災校舎があり、震災伝承の相乗効果も期待できるほか、保存の費用も安全対策以外にかからないため、急きょ決断した。

■ 遺構へ集客する工夫を

気仙沼市の震災遺構が荒浜、野蒜と異なるのは、津波で被災したままの状態で気仙沼向洋高校の旧校舎が残されていることである。教科書や実習用品が散乱したり、自動車が積み重なっていたりする光景は、もう気仙沼以外では見られないかもしれないほど貴重なのだ。

それでも心配なのは入館者数と入場料である。気仙沼市は入館料を大人 600 円、子ども 300 円にしても、初年度で 7 万～8 万人、5 年目でも 5 万人をキープすると試算してきたが、無料で仙台空港にも近い旧荒浜小学校の実績を見ると、かなり厳しい目標であることが分かる。有料であれば、無料施設との違いを出さなければならない。

市は昨年、遺構と伝承施設の管理運営基本計画を策定するための業務委託をプロポーザル方式で公募したが、条件を満たす応募がなく、条件を緩和して再募集した。結果的には国内屈指のシンクタンクである三菱総合研究所に決まったが、応募条件から「指定管理受託の意向があること」が外されたため、施設を運営する団体が出てくるかどうかの不安が残されている。

来年 3 月の供用開始に向け、契約では今年 3 月末までに管理運営基本計画が策定される予定である。管理運営醜態を含めた組織計画、料金設定や収支計画もまとめられるが、野蒜の防災体験型宿泊施設のようにサポーター募集のような工夫が求められている。また、県が検討している遺構ネットワーク、知らない人も立ち寄れるような集客の仕掛けも必要だ。遺構としての最大の役割が、津波防災の意識向上であることも忘れてはならない。

旧荒浜小の近くにはパークゴルフ場（**写真㊤**）がある。仙台市の「せんだい 3.11 メモリアル交流館」は地下鉄東西線の荒井駅の中に保育所と並んであり、生活の中で震災を忘れないようにしている。東松島市の震災復興伝承館はコンビニとセットだった。こうした先進事例から学べることを生かすためにも、県が検討している遺構ネットワークの早期構築を期待したい。

過去の気仙沼復興レポートは気仙沼市議・今川悟ホームページで公開中。http://imakawa.net